

## 誰かわたしをとめてほしい

マルタとマリア、このふたりの姉妹を描き出すルカの筆は、実に見事なものです。福音書記者ルカは医者ではなかったかと言われており、画家の才能があったと言う人もいます。最初に書かれたマルコによる福音書と比べますと文法も正確で言葉も豊か、12色の色鉛筆で福音書という絵を描いているのがマルコだとしたら36色の色鉛筆で仕上げているのがルカでしょうか。このマルタとマリアのエピソードも一度聞いたら忘れられない。わたしたちの心のなかにふたりが住みついて、イエス様と会話を始めてしまう。なくてはならないものはひとつだけである、という主イエスのお言葉が耳元にのこる見事な記事だと読むたびに思われます。

ルカは他の福音書に比べて弟子たちの派遣に頁を割いています。12弟子を派遣する記事はほかの福音書にもありますが、72人を二人ずつペアにして派遣する記事はルカにしかありません。そこで伝道に遣わされたときの心得をイエスさまは、村に入ったらどこかの家に入り、「この家に平和があるように」と挨拶し、そこにとどまって出されたものを食べ、飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だから、また家から家へ渡り歩くな、と勧めました。こういう状況がまさに今日よみましたマルタとマリアの家で起きている。つまりこのエピソードは派遣を受け入れた側の状況を描いたものになっているのです。マルタとマリアはイエスさま一行を滞在させ、イエスさまの話を聴きたい、あるいは病気を癒やして頂きたいとやってくる人たちの対応を迫られた。これは大変だったろうと思います。光栄なことだったでしょうが、きりきり舞いですね。そこでマルタが今風の言い方をすれば「切れて」しまうわけです、妹のマリアはどこ？

イエスさまの足元に座ってお話を聞いているじゃない。イエスさま、ひどくありませんか。マリアはわたしだけを働かせています。注意して手伝うように言ってやって下さい！こんな状況だったでしょう。

わたしはこのところ、ルカによる福音書にだけ記されているエピソードで連続説教をしているために、このマルタとマリアの記事は載せられるべくして載せられた記事だと気づきを与えられました。というのは、この姉妹の諍いは実はイエスさまに付き従っていた婦人たちの現実を照らしていたのではないか。ルカは8章1節以下に「婦人たち奉仕する」という記事を書いて、主イエスに出会って救われた婦人たちがイエス様や弟子たちとともに巡回して伝道に仕えていたことを証言しています。名前のわかっている者ではマグダラのマリアや、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、スサンナといった女性をあげ、ほかにも多くの女性がいて、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していたと記しています。そこでわたしは想像するのですが、この「マルタとマリア」のような出来事が現実には、巡回して伝道をする主イエスの一行の、婦人たちのなかでも起きていたのではないか。のちに弟子たちのなかでは誰がイエスさまの右に座るか、左に座るかということが問題になったように、奉仕をする女性たちの中でも誰が一番奉仕したか、喜んでもらえたかあたりから始まって、マジメな婦人ほど自分のように働かない誰かのことで不満をもったり、腹を立てたりすることもあったのではないのでしょうか。現代も、教会に限らず、さまざまな共同体を支えるマルタはたくさんおられますから、わたしはこの想像はあながち間違っていないと思うのです。だからこそ福音書記者ルカは、このマルタとマリアのエピソードを丁寧に扱ったのではないか。これはほんとうに切実な問題だったのです。

この箇所で説教をするのはたぶん3回目ではないかと思うのですが、過去二回を振り返って自分自身のなかに消化不良な思いが残っています。どういうことかと言いますと、ここで「切れて」しまったマルタが、イエスさまにたしなめられる。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただひとつだけである。マリアは善い方を選んだ。それを取り上げてはならない」、そう言い渡される。これにわたしの中にもいるマルタがどうも納得しない。そうはおっしゃいますが、わたしの代わりにいるんですか？誰か他の人がやってくれるのですか？そういう喧きがサイダーの泡のように湧き上がってくる。腑に落ちない。そんなこと言ったって、誰かがやらなければいけないじゃない。自動で、ご飯も足すすぎの水も出ては来ませんよ！そう与えられた役割を生きることが存在意義となっているわたしは、イエス様のお言葉を素直に「アーメン」とは言えないのですね。むしろ、どうして分かってくれないの。もっとわたしをねぎらってくれてもいいのにと、思ってしまう。皆さんはそう思いませんか。「誰か、わたしを、止めて欲しい」。忙しさが、心が亡ぶ忙しさが、あるいは心を忘れる忙しさが、いつのまにか自分の存在の証明となって、役割となって、自分を駆り立て、自分と同じようにしない者を責め立てる。正しさの基準が自分の忙しさや働きになってしまっているわたしを、止めてくれる者はいないのだろうか。このルカが伝えたエピソードは、わたしたちの急所を正確に突くものです。今日もその意義を少しも失っていない。飼い主のいない羊のような状況とは、まさにこういう状況を指しているのではないだろうか。振り切れて妹を責める彼女に向かって、「マルタ、マルタ」主はそう呼びかけられました。この呼びかけは優しい。そして、慈しみと配慮に満ちています。どうどう、どうどう、

いきり立っている馬を鎮めるみたいに、一回の呼びかけではもう忙しさを心を乱し、目を回しているマルタには届かない。だから、イエスさまは「マルタ」、「マルタ」と重ねて彼女の名前を呼ばれるのです。新約聖書でイエスさまが二度名前を呼んで相手をストップさせるのは、マルタとパウロだけです。ダマスコに行き、イエスを主と告白する者たちを逮捕しようと殺害に息を弾ませて道を急ぐパウロに向かって「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」とストップを掛けられる。この二度の呼びかけは、わたしを見なさい、マルタ。止まりなさい、マルタ、という憐れみに満ちた主の呼びかけです。真面目で一生懸命なマルタを、イエスさまは決して見捨てられない。彼女が自分の与えられた役割の中で、しかもイエスさまに喜んでもらおうとしていることで人を憎み、滅んでいこうとする悲劇的な勘違いを見過ごされない。「マルタ、マルタ!」、止まりなさい。心をひとつにしなさい。なくてはならないものはただひとつなのだよ、そう教えられたのです。そして、それをあなたの妹マリアは選んでいる。それは決して取り上げられてはならないものなのだと言われる。それは何だったでしょう。何がマルタとマリアの姉妹を決定的に分けたか。それは、聴くことでした。耳を傾けることでした。イエスさまの足元に座ってお言葉に全集中する。これです。木曜日の婦人会夏期集会で、わたしは安息日の問題にふれました。ユダヤ教では土曜日、キリスト教では日曜日が神に捧げられた日として労働が禁じられる。「安息日を覚え、これを聖別せよ」、十戒の第4戒ですね。この「安息日」はヘブライ語で「シャバット」と言いますが、その語源は「やめる」「とまる」という意味なのです。マリアはイエス様と出会って「とまった」。そうして日常から切り離された。マルタの妹であることを「やめた」。そうして神の国の子とされたのです。

こうして初めて「安息」がわたしたちのもとに訪れる。深く息をつくことができる。平安が与えられ、神に向けられた思いに整えられて、千々に乱れていた心がひとつになる。マルタの描写に用いられている「思い悩み、心を乱している」という表現は、心があちこちに引っ張られる状態をさしています。神さまに向かう一筋の心ではなく、あちこちに散ってしまう。それがマルタの状態であり、わたしたちの置かれている状況なのです。この関連で思い出したことがあります。半田教会では司会を役員の方に順番に担っていただいています。開会の祈り、牧会祈禱とも言いますが、そこで礼拝への感謝を、すべてのことから解き放たれて、この場に集えることを感謝しますと祈る方がいます。すべてのことから解き放たれて、この場に集められている。平日にわたしたちが負っている様々な役割、責任、そういうものから解き放たれて召し集められている。これがまさにマリアが体験していることなのです。マリアは、マルタの妹であることを止めている。役割に生きることを放棄しているのです。聖日とはそのような日。神様が主人として、わたしたちを招いて下さる日です。今日は、聖餐式がありますが、イエス様がわたしたちを救いの食卓に呼んで下さる。この出来事をドイツの神学者ハンス・ヨアヒム・イーヴァントが素晴らしい言葉で言い当てていますので一部を紹介します。「マルタは、イエスのためにそこにいて奉仕しようとしています。マリアにとっては、あの方、イエスがそこにおられるのです。マルタにとっては確かに迎えするのに名誉な大事な客には違いありませんが、イエスは他の客と同じひとりの客に過ぎませんでした。しかしマリアにとってイエスとは単なる客、名誉といったことではなかった。家とか、テーブルとか食事とか、そういったものはすべて、突如として本質的なものではなくなりました。

なぜなら彼女こそが、神の家の客となっていたからです」、そう語るのです。マリアはイエスを迎える側の家の人間ではなく、まさにイエスさまが神の国の訪れを告げ知らせ、人々を招かれる。神の家の客としてイエスさまの足元に座ったのです。ここに安息日の本質、とまって、やめて、神の語りかけに耳をすまし、その中で自分を作り変える人間に再び創造される。リ・クリエイトされる。神の言葉に全集中することで、御言葉によって生き始める新しい人間とされる恵みの出来事がある。そのような出会いの場所を取り上げてはならない。マルタに最大限の愛情をもって呼びかけ、彼女をも、マリアと同じく聴き従って生きる存在となれるように、みずからの役割に留まり続けることに頑なになって滅んでしまわないように、マルタ、マルタ、と呼びかけるのです。向きを変えなさいと語りかけ、聴くことを選んだ妹マリアを、イエスさまに招かれ、御言葉に聴く存在として生き始めたマリアを、イエスさまは指し示したのです。この招きは、わたしたちすべてに向けられたものであることを信仰において受け止めたく願います。

お祈りいたします。